

星の日週運動の寫眞に

就いて

會員 西堀榮三郎

私が星の美しいことを知り初めたのは一般の人々の様に幼少の時からでせうが、星に関する書物を読み始めたのば非常に新しいことなのです。それは日本の天文學者達が例の鳥嶋で太陽を覗んだ時から日食に刺戟されて三澤氏の「天界の現象」を熟讀したのが始まりで、昨年の秋故一戸博士著「天文學」下巻の出版に會ひよく「天文學」の一端をうかがふことになつたのです。かくて當時までは唯星をながめては、その壯麗な美を愛するだけであつた私が突然星の學術的意義を知り、爲に私の研究的本能が一時に動き出してさうさう天文學と私の關係を斷るに斷れないものとしてしまひました。

私は以前から學術的の寫眞に興味を持つてゐましたので天文學書中の寫眞を見ては何時も星や銀河や月や其の他種々な天體を寫して見たくてならなかつたのです。然しそれは裝置等が許しませんので思ひ止まらねばなりませんでした。所が唯一つ何んの裝置もなくして

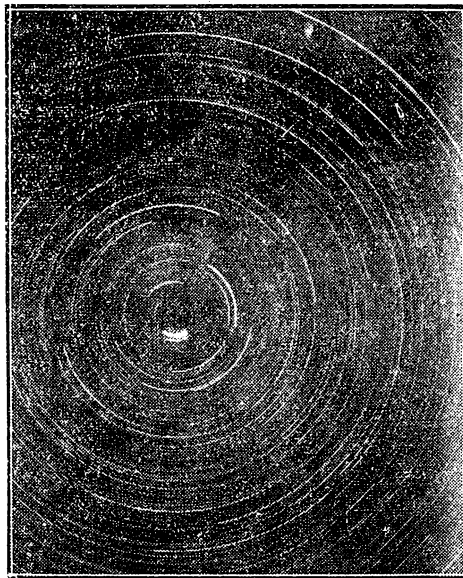
撮影の出来る面白いことを知つて早速やつたものがこの日週運動の寫眞です。

昨年十一月末のことです。それは寒い夜でしたが、露の多い屋根にのぼり書物や色々なものを臺にして寫眞器を北極附近に向けて撮影を初めました。約

二時間の後撮影をやめ其夜直に現像をしました所が私の豫期には大部分背いた原板を得たのです。それはレンズが露の見舞をうけて星の像が一方は不明瞭になつたのです。

私はこの失敗にはぐちけないでその後毎夜晴天を求めてゐましたが、思はしい夜は十二月

月の末まで得られませんでした。こんどは前回の失敗に鑑みて、デウ・カッパ（レンズの前にメガホーンの様な筒をさりつけ露を防ぐ裝置）を作つて撮影しました。それが今こゝに出して戴きました寫眞です、これは二十三



日の十一時二十三分から翌日の三時五十三分まで正確に四時半の露出でやつたものです。然しこれまでも決して私の希望を満足したものではありません。と言ふのは私が夜中にシャッターを閉ちに行つた時に東天に實に立派

な月がさしのぼつてしまつてゐたのです。それが爲小々な星の像は消されてしまひました。私はこんなにして二枚の原板を得、その正確な圓弧、微妙な線、星の光度による太細、これらを見ては、どの星がどこに像を作つて

居るかを實物と見較べ又原板から星圖を作り
なごして獨りほゝえんでゐました。

こうして私は原板をいぢつてゐる時この二
枚の原板を重ねて見ると驚いたことには二枚
の原板に於て日週運動の中心である北極は全
く一致する筈なのに北極星に對して全く反對
の側にあるではありませんか。即ち地軸が常
は二度半もかたむいてゐた」と第一回の寫眞
が言つてゐるのです、これは實に有得ないこ
となのです。寫眞がうそを言つてゐるのか本
當なのか？

私はそれに就いて色々と調査して考へまし
たが結局わからなかつたので幸、大津天文臺
長藤井氏の紹介で山本先生におめにかゝり其
の事をお話したので、何時か私に解決の時が
来るだらうと楽しみにしてゐます。

さて斯様に趣味のある學術的な寫眞は何の
裝置も無くて何人も得られるのですから寫眞
器を持つて居られる讀者諸兄は是非撮影して
研究の資料に供給せられることを切に願ひ
たします。

尙左に撮影上の注意其他を記載します。老
婆心か知れませんが。

一、日週運動

- 一、必ずデウ、カッブを使用すること、
- 二、月なき完全な暗夜を撰ぶべきこと
- 三、焦點距離は最遠(通常百呎)の風景を
撮影する時と同様にすること
- 四、場所はなるべく近くに街燈などのな
い震動の少い所から撮影すべきこと
- 五、シボリは必ず全部開き露出時間は一
時間以上長ければ長い程よろし。
- 六、現像は全體が黒味を帯びない程度で
充分すること。

二、黃道光(此頃は實に立派なものです。
是非撮影の價值があります。)

前項の外に尙左の注意をして下さい。

- 一、寫眞器は縦にして黃道光が充分肉眼
で見え出してから、黃道光の充分上方
をれらう必要があります。

- 二、露出時間は一時間以上二時間以下で
勿論シボリは全開のこと。

オクスフォード・ノートより

近頃、新規發行のブレテンを二種類も受取
つた。一はオランダからで、彼所のアムステ
ルダム、グロニンゲン、ライデン、ウトレヒ
トあたりの天文臺や研究所や學會などが協同
して發行してゐるものである。他の一は「日
本の天文同好會から」として京都で發行して
ゐるものである。此の後者の名については古
い昔しなつかしさがある。英國天文協會で
元は、「理學同好會」の名で創立されたもので
あると記憶する。實際、會合の動機が義務と
してよりも、むしろ友達としての考へにある
方が、吾々一般に觸れるものである。尙又、
之れは科學の歴史に、殊に天文學の歴史に本
統の重要さがある。遠く離れてゐても御互ひ
に、仲善き友達としての交はりがあれば、事
業は協同によつて大に利益を得ること詩合で
ある。天文の友誼が大切であることを、遠い
日本からの此の送り物によつて示されたこと
を喜ぶと同時に、吾々自身が此に餘り氣が
附かなかつたことを、少々遺憾に思ふもの
である。

山本助教授

外遊の前、來る七月初めより約三週間、長野縣淺間山に出張、
地球重力偏差を觀測せらるゝ筈。